右しゅとれーと（本編）

まっしゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
右しゅとれーと（本編）

【Ｎコード】
Ｎ０６９４Ｏ

【作者名】
まっしゅ

【あらすじ】
このお話は私、藤田斗真≪ふじたとうま≫が学園にはびこる悪をこの拳　で粛清し…」
「あきれた！アンタ何もやってないじゃない！！いいからさっさと部室の
鍵開ける！」
「すいません、咲菜≪さくな≫さん」
この物語は学園を舞台に悪と対峙する聖拳部≪せいけんぶ≫の愛と

勇気　と感動物語である。

「何よ！この嘘１００％のストーリー紹介は！しかも鍵、まだ開いてない　んだけど！！」

「すみません…」

覚悟しなさい　（"＞ω＜）っ）　？（前書き）

短編版の続きですゞ（、д、ｑ汗）＋・・

覚悟しなさい　（"＞ω＜）っ））　？

「アンタは藤田斗真≪ふじたとうま≫！！」

「君は…ええと…」

「まさか私の事覚えてない…とか？」

「もしかして！！マリ…ちゃん…？」

「はい？」

「残念！違ったかぁ。ほら、ドラマとかアニメだと初恋の相手が美人の高　校生になってある日突然目の前にみたいなさ！でね、マリちゃんっての　は幼稚園の時家が隣で…っておわッッ！！」

左、左、右。彼女の拳が僕の顔面めがけて飛び込んでくる。

「すごいパンチ！フットワークもなかなか…」

「って全部かわしてんじゃん！！私は白石咲菜≪しらいしさくな≫。ほ　ら、白石道場の！」

「白石道場？」

「まだとぼけるつもり！？小学校の卒業式の日私はアンタに…」

キーンコーンカーンコーン。少しトーンダウンした彼女の声をチャイムの音がかき消す。

「復帰早々遅刻はまずいからひとまずこれで。用があるなら放課後

アメフ　ト部の部室に来るといい。」

「ちょっと逃げる気！？待ちなさいよ！！」

せっかくあれこれ考えた教室登場プランも活用には至らず、彼女に追われて僕は慌てて教室に滑り込んだ。

覚悟しなさい　（"＞ω＜）っ））　？

朝の彼女は同じクラスで、どうやら僕が入院中に転校してきたらしい。
僕に何の恨みがあるのか授業中も休み時間も刺さるような視線が痛かった。もちろん、好意的な意味でなく敵対心むき出しのそれが放課後まで続いた。
それにしても…誰なのかさっぱり思い出せない…。

ばしっ！！
ボロい部室のドアが悲鳴をあげたような豪快な音と共に、あの視線の主が現れた。

「ちゃんと来てあげたわよ。ここなら誰もいないみたいだし、私と勝負してくれるんでしょうね？」

「その前にひとつだけいいかな？」

「泣き言は却下だから。」

「そうじゃなくて…。いまいち、ってか全然僕と君の関係がわかんないんだけど…」

「まだ言うか！！」

右、右、左ローキック。朝とは違うコンビネーション。

「暴力反対！パンチだけじゃなくて蹴りもあるとは侮れない。」

「とか言いながらまた全部かわして！！そこまでとぼけるなら話してあげる。私の人生に汚点を刻んだアンタと私の５年前の話をね！」

（あんな屈辱的な話をさせるなんて…まさか！こいつわざと覚えてないふりして私に恥をかかそうと…
いや、そんな感じじゃないし仕方ない…。）

（５年前…小学生だよな。その時の僕は何をしたんだ！？女の子の汚点になるような事なんて…まさか
無意識のうちにあんな事やこんな事を！？まさか…）

少女は覚悟を決めて話始めた。少年は少女とはまた違った覚悟を持ってそれを聞いた。

覚悟しなさい　（"＞ω＜）っ）　？

そう、あれは小学校の卒業式の日。他府県の私立中学に進学が決まっていた私にとってはこの町ともお別れの日だった。て言っても、特別に仲のいい友達がいたわけじゃないし、町での大切な思い出の無かった私にとっては何でもない一日。その日も家に帰って日課のトレーニングに汗を流していた。そこまでだったらこの日が私の記憶に留まることはなかったと思う。

「おい、白石いたぞ」

「あんた達、人の道場に勝手に入ってきてどういうつもり？」

そこにはクラスの男子3、4人の姿があった。何かと私も含めたクラスの女子に手を出してくる、いたずら好きというかそういう類の連中だ。

「お前、中学はどっか遠いとこ行くんだろ？」

「だったら、何？」

「お前にやられっぱなしで終われるか！今日こそお前の泣き顔見せてもらうからな！」

そういう事か。私はこれまで何回もこいつらと戦ってきた。結果は私の全勝。

小学生とはいえ男子たるもの、女子にやられっぱなしではプライドが許さなかったのかもしれない。

「何回やっても一緒だと思うけど。あんた達、けんかも弱いし学習能力もないんだ。」

「うるせぇ！今日は俺たちが相手じゃない。助っ人の先生がお前の相手だ！」

こういう時の助っ人は大抵こいつらの兄ちゃんか中学の先輩ってのがセオリーなパターンだ。そんな風に考えた私は少しだけ身構えた。ま、たとえ年上相手だろうが負ける気はこれっぽっちもなかったけど。それなのに、そこに登場したのは…

「弱いものいじめをする悪の手先はどこだ！」

何…こいつ…これが助っ人！？見た感じ同い年くらいかなぁ。とにかく助っ人オーラはゼロに近い…
背だって私の方が勝ってるし。

「トウマ、こいつだよ！俺らのクラスで好き勝手してるけんか番長は！」

「誰がけんか番長だ！だいたい、先に手出してくんのはいつもそっちで」

「話は分かった。けんか番長！！これまでみんなが受けてきた痛み、今日お前に倍にして返す！」

全然分かってないし。そもそも、こいつ誰？トウマ？名前も顔も全く覚えのない相手にいきなり宣戦布告されるとは…そこまで恨みを買うような小学校生活を送った覚えはないんだけどなぁ…

「あんたさぁ、誰だか知んないけどそんなやつらの相手することないよ。別にあんたと戦うつもりもないしさ。怪我したくなかったら帰りなよ。」

「黙れ！みんなが僕を頼って来たんだ。僕はお前を倒し、みんなの笑顔を取り戻す！」

なんだこいつは。ヒーロー気取りですか？こいつもこいつだけど、こんなやつを助っ人で連れてきた連中もどうかしてる。

「あのさ、売られたけんかは買う主義だからどうしてもって言うなら相手するけど…手加減とかはできないよ？」

「手加減なんて必要ない。全力と全力でぶつかってそしてお前をねじ伏せる！」

どこまでも熱いやつだなぁ。正直、悪意があってやってる訳じゃなさそうだしそういう相手に拳を振るうのは苦手だ。けど…勝負するまで帰りそうにないか。

「わかったわかった。じゃあ相手になってやるよ。ホントに手加減しないからな。」

「くどい！それじゃこっちから行くぞ！！」

そう言うと同時に奴は私目がけて最短距離で突っ込んできた。右肩に少し溜めができる。単調な右のストレートか。右にかわして、逆にこっちの右パンチでＫＯだ。瞬時にそう判断し、重心を右半身に移そうとしたその時

どすっ

それは今まで私の聞いた事のない音。自分が床に倒れる時の音だった。
なんで私は床にうつ伏せになっているんだろう？その答えは頭では到底理解できない現象だった。
思考停止状態の私に唯一あった感覚は痛みだ。左の脇腹あたりが痛い。
あ、そうか。あのパンチに当たっちゃったのか。
でも、なんで？あの距離なら間違いなくかわせたはずなのに…。

「正義は必ず勝つのだ。」

首を曲げて見上げた私に、奴はそんなことを言った。
脇腹の痛みと、初めての敗北感を味わった心の傷で私は立ち上がることができなかった。

覚悟しなさい　（&ｑｕｏｔ；＞ω＜）っ）） ？

「どう？思い出してくれたかしら？」

口をはさむでもなくうなずくでもなく、ただじっと話しを聞いていた僕だったが、そう聞かれて思わず言葉が飛び出した。

「あの時道場にいた子が君なんだよね？」

「アンタ話聞いてたでしょ！？そうよ！あの時の屈辱は忘れてない…だから今すぐ私と勝負しなさい！

そして今度は私が勝つんだから覚悟なさいよね！」

「勝負なんて必用ないさ。」

「何！？逃げるつもり？それとも私相手じゃ不満なわけ？」

「そうじゃない。僕を気の済むまで殴ってくれないか？」

今まで炎のように燃え上っていた彼女の気迫は一気に鎮火され、熱い視線から冷たい視線へと変わった。

「アンタ、そんな趣味あったんだ…」

「何か勘違いしてるみたいだけどちゃんと話を聞いて！僕はあの時道場にいた君は男だと思ってたん　　だ。」

「確かに髪はショートで色も黒かったから無理もないけど。ってそれとあんたの変態的趣味とどう関係　あるのよ！？」

「だから話は最後までちゃんと聞いて！僕はどんな理由であっても女の子には手を出さないと誓ってき　た。それがヒーローの条件だから…。なのにあの時女の子に手を出していたなんて！！ヒーロー失　格さ。だからせめてもの償いに殴るなり蹴るなり気の済むようにやってくれ。」

「ちゃんと聞いてもよくわかんないんだけど…あぁ、もぅ、と・に・か・く！！一方的に私があんたを　殴っても気が済まないの！ちゃんと拳を交えてそれで決着つけたいの！」

「それは無理だよ。」

「私が女であんたがヒーローだから？そんなばかな理由だったら納得できないんだけど。」

「それもあるけど…右の肩が上がらないんだ。僕が入院してたのは知ってる？まだ怪我が完治してなく　て右腕はこんな状態。」

腕をぶらぶらさせ彼女に視線を送る。彼女は僕の話を信じたのか、それとも僕がやる気のない事にようやく気付いたのか、さっきまで瞳の奥に輝いていた何かはもうそこにはなかった。

「それで、腕はいつ治るの？」

「いつだろ？リハビリ次第ってとこでまだ何とも…」

「早く治しなさいよね。治して私と勝負なさい！ってゆーかさ、肩上がんないならアメフトなんてでき　ないでしょ！？部室なんてい

ないでさっさと病院行ってリハビリしなさいよ！」

「アメフト？あぁ、ここはアメフト部の部室だけど僕はアメフト部員じゃないよ。それにアメフト部は　部員不足で去年廃部になったし。部室だけはこうして残ってるんだけど。」

「じゃぁあんたはこんなとこで何してんのよ？」

「部活だよ。もちろんアメフトじゃないから。ここは聖拳部の部室なんだ。」

「せいけん部？？」

僕と彼女の出会いが、いや、正確には運命の再会が聖拳部の歯車を大きく動かしていくことになるのだった。

聖拳部へようこそ（◎、∀、）ノ・。・：＊？

勢いよく部室に乗り込んできた彼女も、僕と勝負できないと知ってからは一気に拍子抜けといった感じで今はキョロキョロと室内を見回している。

「まだアメフト部時代に使ってたものがそのまんまだけど今は聖拳部の部室なんだ。」

「で？」

「で？って？？」

「せいけん部って何かって聞いてるの！！」

「う～ん…一言でいうと学校内で困っている人を助ける正義のヒーロー！みたいな。」

「その一言でまとめられてもよくわかんないなぁ…。不良に制裁を下すとかそんな感じ？」

シュッ、シュッと彼女は2回左の拳を突き出した。どうやら“制裁”という意味のジェスチャーらしい。

「この学校に不良なんていないよ。無くした教科書を探してあげたり、テスト前にノートをコピーして　あげたりそれから…」

「ただの便利屋じゃない！」

「便利屋!?僕は人助けをするヒーローで便利屋なんかと一緒にされると困るんだけど。」

「なんかこだわりあるみたいだけどどっちでも一緒!!それに部活っていってもさっきからずっとそこ　座ってるだけよね?ヒーローって暇なわけ!?」

「何もしないのは平和の証だよ。だれも困ってる人がいないってことだからね。」

「ふぅ〜ん。」

彼女はあきれた様子でまた室内を見回している。一周回ったところで僕と目があう。

「じゃあさ、困ってる人がいたら助けてくれるの?」

「もちろん!僕にできることなら最大限!」

「ここにいるよ。困ってる女の子が一人。」

わざとらしく目をあちこちにやるが、当然“女の子”という存在はこの空間においては目の前の彼女しかいない。

「私ね、数年前の決着をつける為にある人と勝負したいんだけど相手が引き受けてくれないの。ってこ　んな依頼なんだけどどうかな?」

「それって思いっきり僕のことだよね?」

「正義のヒーローは何でも解決してくれるんじゃないの？」

「ほら、さっきも言ったけどまだ腕が完治してなくて…だから…その」

密室。迫りくる敵。追い詰められたヒーロー。
テレビなんかだ最大のピンチに助っ人が現れてという場面なんだろうけど…
そんなどうでもいいようなことを考えていた正にその時、僕の前にも助っ人が現れた。

「斗真君！！」

現れたのは助っ人というより悪の怪人にさらわれる、そんな役がぴったりな小柄な女の子だった。

聖拳部へようこそ（◎、∀、）ノ・。・：＊？

「舞維！」

部室に入って来た女の子の事を僕はよく知っている。世界中で母親の次によく知る“女性”が彼女だった。

「斗真君今日から学校来てたんだね。退院できてよかった。もう、私にくらい教えてくれてもよかったんじゃない！？」

「ごめん、ごめん。別に隠してた訳じゃないんだけど。いろいろ心配かけたしなんか言い出しにくくて。」

「そんな気遣わなくていいのに。それよりここにいるって事は部活やろうとしてるでしょ！？退院初日なんだから無茶しないで今日は一緒に帰ろ♪」

「そうだな。今日は特に依頼もないし…」

鞄を手にした時、既に殺気には気づいていた。強引にそれを無視して部室の扉に手がかかろうとしたその時、殺気は言葉となって僕の背中に突き刺さる。

「帰っちゃダメ。」

女の子にこんなセリフを言われて帰る男子なんているもんか！だが勘違いしてはいけない。
甘〜い感じで、上目使いで呟く“帰っちゃダメ”ではもちろんないのだ。もしそうならこんなに首を後ろに回すのが嫌なもんか。

「ちょっと！！さっきから私を無視してどういうつもり！！まだ依頼の事話ついてないんだけど！！」

どうやってこの場を切り抜けようか。うまく彼女をかわす魔法の言葉は出てこない。そんな中、

「あーーーっ！白石さん？白石咲菜さんだよね？」

以外にも僕より先に口を開いたのは舞維の方だった。

聖拳部へようこそ（◎、∀、）ノ・。・：＊？

「斗真君、なんで白石さんが部室にいるの？もしかして入部してくれたとか！？」

「舞維は彼女のこと知ってるの？？」

僕はちらっと彼女、白石さんの方に目をやる。てっきり睨み返されると思っていたが、どうやら今彼女の関心は舞維の方に向いているらしい。

「知ってるもなにも学年で知らない人いないくらいの有名人だよ！！成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗！それでいて男子に媚びないクールビューティ！！まぁ、転校してきたのは斗真君が入院中だから知らないのかもしれないけど、とにかくすごい人なの！！」

もう一度彼女の方に目をやる。よく見ると確かに舞維の言う通り、万人受けしそうな典型的な美人といったような顔立ち。そう、アイドル女子アナを連想させるようなそんな感じだ。

あまりにまじまじと見つめたせいか、今度は鋭い眼光が僕の瞳をとらえた。反射的に床に目を戻す。

それにしても…あのときのあの相手が目の前のこの女の子とはまだ信じられない。

「それで、どうなの斗真君？白石さんが入部希望なら断る理由ないよね♪あ、それとも依頼の方かな？」

「ちょっと待って！！」

一人盛り上がる舞維についに白石さんの待ったが入る。

「私はこんな部に入部なんてしないわよ。あなたはこの部の関係者？」

「こんな部なんてひどいなぁ…。あ、ご紹介が遅れました。私は高城（たかぎ）舞維。この部のマネージャー兼斗真君の有能な右腕ってとこかなぁ。よろしくねっ♪」

「ふ～ん」

僕と舞維を交互に見やった彼女は、購買のやきそばパンを買い損ねた学生のようにがっくりと肩を落としてふらふらとドアの方に向かって行った。

「なんか邪魔が入ったから今日は帰るけど、ちゃんと依頼の事考えといてよね！」

入って来た時と同じように豪快にドアを閉めた彼女は、放課後の廊下に足音を残して去っていく。

「斗真君、もしかして私邪魔だった？」

「いや、僕にとって舞維はヒーローそのものだよ。」

こうして復学初日の長い一日にようやく幕が下りた。
けどそれはこれから始まる新たな聖拳部の長い長い日々のほんのプロローグのようなもので…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0694o/

右しゅとれーと（本編）

2010年11月2日14時01分発行